第1章：銀雪の秘め事、浴衣の帯が解けるまで

車の窓の外を流れる景色が、徐々に深い緑から白銀の世界へと変わっていく。冬木市の喧騒を離れ、さらに山奥へ。タイヤが新雪を踏みしめる音が、心地よいリズムを刻んでいた。

「ねぇ、お兄ちゃん。あとどれくらい？」

助手席から甘えるような声が響く。視線を向けると、そこにはこの世のものとは思えないほど美しい銀髪の少女――イリヤスフィール・フォン・アインツベルンが、退屈そうに頬杖をついていた。その赤い瞳は、無邪気な好奇心と、僕だけを映す情熱を宿して輝いている。

厚手のニット越しでも分かるその圧倒的なボリュームは、車の振動に合わせてたゆん、と揺れる。

「……ん？　何見てるの、お兄ちゃん？」

視線に気づいたイリヤが、小悪魔的な笑みを浮かべて身を乗り出してきた。

「ふふっ。嘘つき。私のこと、すっごく見てたくせに。そんなに気になるなら、もっと近くで見てもいいんだよ？」

辿り着いたのは、人里離れた山間にひっそりと佇む高級旅館『雪華（せっか）』。玄関で女将に「お兄ちゃんの『恋人』なんだけど？」と抱きつき、僕を戸惑わせた。

案内されたのは、専用の露天風呂がある離れの客室『月読（つくよみ）』。

「ねぇお兄ちゃん。早くこっち来てよ」

イリヤはコートを脱ぎ捨て、身体のラインがはっきりと出る薄手のノースリーブニット姿で手招きをした。その細い腰からは想像もつかないほど豊かに膨らんだ双丘が、ニットの生地を限界まで押し広げている。

「い、いや、まずはイリヤだけで入っておいでよ。私は後で……」
「だーめ。せっかく二人きりなんだもん。一緒に入らなきゃ意味ないでしょ？　それとも……私が子供っぽい身体だから、一緒に入る気にならない？」
僕は彼女の挑発に負け、頷いた。「わかったよ。一緒に入ろう」
クローゼットから浴衣を取り出したイリヤは、すでにキャミソールとショーツ姿だった。浴衣の襟元は、彼女の胸のボリュームに耐えきれず、だらしなくはだけてしまいそうだ。
「ふふ、わざとでもいいのに……。もっとぎゅってして？」
僕が帯を結ぶ間も、イリヤの甘い吐息が部屋の中に満ちていく。
「浴衣ってね、脱ぐのがすごく簡単なんだよ？　温泉に行く前に……ちょっとだけ、イタズラしちゃう？」

イリヤは僕の耳元で囁くと、手のひらを彼女の帯へと導く。その下にある膨らみの柔らかさが、僕の手のひら越しに伝わってきた。

「私の身体、お兄ちゃんのために特別に造られたんだから……たくさん愛してくれなきゃ、嫌だよ」

僕は彼女の腰に手を回し、その小さな身体を引き寄せた。雪の降る静寂な夜、僕たちの長く甘い時間が、幕を開けようとしていた。

第2章：雪見露天、秘密の花が開くとき

「ちぇー。お兄ちゃんの意気地なし。せっかくいいムードだったのに」と不満を漏らしつつも、僕たちは露天風呂へと向かった。

湯船に浸かると、イリヤの規格外に大きな胸は、豊かにふわりと湯面に浮かび上がり、湯気の中でさらに大きく、艶めかしく主張していた。

「見て、お兄ちゃん。ふふ。すごいでしょ？ 昔は、もっとぺったんこだったんだよ。でも、お母様が残してくれた魔力のコアが、私の身体をこんなに立派にしてくれたの」

彼女は身体をくねらせ、湯の中で乳房を揺らす。

「この胸、ぜーんぶ、お兄ちゃんのためにあるんだから。私のアインツベルンとしての『力』そのもの。ねぇ、昔は小さかった私の身体が、こんなに大きくなっちゃって……お兄ちゃん、嬉しい？」

僕の腕の中で、イリヤは誇らしげに胸を張る。

「ふふっ。よかった。だって、お兄ちゃんがいつも見てくれるんだもん。触ってくれるんだもん」

洗い場へと移り、濡れた銀髪に温かいシャワーをかける。

「ふふ、ねぇ、もっと強く。お兄ちゃんにぎゅうってされるの、大好き」

今度はイリヤが僕の身体を洗い始める。小さな手が、石鹸の泡を立て、僕の肌の上を滑り始めた。そして、無遠慮に僕の身体の急所へと触れてきた。

「ここ、いつもお兄ちゃんが頑張ってくれるところだよね？　ちゃんと洗って、元気にしてあげなきゃ。はぁ……。熱くなってるよ？」

再び露天風呂。僕たちは遠慮なく抱きしめ合い、お互いの身体を重ね合わせる。湯船の中で触れ合う肌は滑らかで、熱い。

「んっ……お兄ちゃん、動いちゃダメ……。あぁ……、ダメだよ。私、もう……」

イリヤの言葉は乱れ、もはや意味をなさない。湯の中で、二人の肌が摩擦し合うたびに、イリヤの口から甘い吐息が漏れた。

「はぁ……、お兄ちゃん、もう限界……。お部屋、行こ？ 私、もうお兄ちゃんの全部が欲しい……」

雪の降る冷たい景色の中、僕たちの情熱だけが、激しく燃え上がっていた。

第３章：銀糸の檻、甘くとろける果実

「はぁ……、身体、乾かして……？」

バスタオルを羽織っただけのイリヤが、ベッドの端に腰掛け僕を見上げる。濡れた銀髪が頬に張り付き、雫が鎖骨を伝って、豊かな胸の谷間へと吸い込まれていく。

僕はタオルを手に取り、彼女の背後に回る。その背中に身体を押し付けてくる。

「んぅ……、とろけちゃいそうで、怖い……」

彼女はバスタオルをハラリと落とし、僕たちはベッドへと雪崩れ込んだ。

「あぁ……っ、お兄ちゃん……重い……でも、嬉しい……」

僕の下で、イリヤが恍惚とした表情を浮かべる。その表情は、完全に「女」の顔だった。

「名前、もっと呼んで……。私を、お兄ちゃんの声でいっぱいにして……」

キスの雨を降らせながら、僕の手は自然と彼女の身体の「中心」へと導かれた。

「ひゃぁっ……！」

掌全体で、その溢れんばかりの質量を包み込んだ。指が沈み込むような、底なしの柔らかさ。

「あぁっ……！　んぅぅ……っ！」

僕が少し力を込めて揉みしだくと、イリヤは弓なりに背中を反らせた。

「この胸、ぜんぶお兄ちゃんのためのミルクタンクだよ？　んぁっ、そこ……っ、いじっちゃ、だめぇ……っ！」

「ひぃぃっ！　あ、ああっ！　頭、おかしくなっちゃう……っ！」

彼女は僕の手をさらに強く胸に押し付け、自ら腰をくねらせて快感を貪る。

「私の身体、もう限界……。お兄ちゃんに全部を差し出す。早く、全部で私を壊して？」

彼女は僕のベルトへと手を伸ばし、熱い吐息を吹きかけながら囁いた。僕の理性は、完全に彼女に支配されていた。

第４章：甘露の泉、聖女の母性

僕はついに、彼女が誇るその豊かな双丘へと顔を埋めた。顔全体が柔らかい肉感に包まれる。

「ひゃぁっ！　ダメ……っ、そこ、直接は……あぁっ！」

僕が舌先で、尖りきった蕾をちろりと舐めると、イリヤは悲鳴に近い声を上げた。

「あぁ……っ、あぁ……っ！　すごい……お兄ちゃんに、吸われてる……っ」

イリヤが僕の頭を抱き寄せ、さらに深く自分の胸へと押し付ける。

「もっと……いいよ。赤ちゃんみたいに、いっぱい吸って？」

僕は貪るように、彼女の柔らかな膨らみに吸い付いた。強く、深く。

「ひぃぃぃぃっ……！　あぁっ、あぁっ、出る……っ！　何か、出ちゃいそう……っ！　魔力も、心も、全部お兄ちゃんに吸われちゃう……っ！」

イリヤは慈愛に満ちた表情で僕の頭を撫でる。

「いいよ……お兄ちゃん。私の全部、あげる。栄養も、愛も、全部お兄ちゃんの身体に入れて……」

ひとしきり左側を愛でた後、イリヤは右側の果実を、自らの手で持ち上げて僕に差し出した。

「こっちは……？　こっちも、寂しがってるよ？　はぁ……、早く、して……」

僕が右側の果実にも食らいつくと、再び激しい快楽の波が彼女を襲う。

「んあぁぁっ！　そこ、強い……っ！　あぁ、あぁ、好き……っ！」

「お兄ちゃん……私、もうダメ……。お兄ちゃんのことしか、考えられない……。愛してる……、愛してる……っ！」

この甘い授乳の儀式は、これから始まる本番への、ほんの序章に過ぎなかった。

第5章：銀の杯、永遠の愛が満ちる刻

「ねぇ、お兄ちゃん……もう、待てないよ……」

イリヤが身体を大きく開き、秘められた花園を僕に晒す。そこはすでに愛液で濡れそぼり、銀の糸を引いて僕を誘っていた。

「私のここ……お兄ちゃんのこと、欲しくて泣いてるの。……聞こえるでしょ？」

僕はゆっくりと腰を沈めた。きつく、狭い肉の壁が、僕を拒むように、そしてそれ以上に強く吸い付くように締め付けてくる。

「んんぅぅぅーーっ！」

イリヤが苦悶と快楽の入り混じった声を上げ、シーツを握りしめる。

「はぁ、はぁ……っ、大きい……お兄ちゃん、大きいよぉ……っ！ お腹の奥まで、届いちゃう……っ！」

最奥まで到達した瞬間、僕たちは同時に深い吐息を漏らした。

「はぁ……っ、すごい……。繋がってる……。お兄ちゃんと私、ひとつになってる……」

舌を絡ませ合いながら、僕はゆっくりと腰を動かし始めた。激しく打ち付けるたびに、イリヤの豊かな胸が激しく揺れ動き、波打つ。

「あぁっ、あぁっ、あぁっ！　すごい、すごいよぉ……っ！　お兄ちゃん、動いてる……っ！　ひぃぃっ！　奥、突かれちゃうと……んあぁぁっ！」

「イリヤ、可愛い……すごく感じるよ、中がすごい締め付けだ」

彼女の喘ぎ声は、快楽の旋律となって部屋中に響き渡る。

「はぁ、はぁ……っ、もっと……もっと激しくして……っ！　私を壊して、お兄ちゃんの色に染めてぇ……っ！」

僕の動きに合わせて、彼女自身も腰を揺らし、僕をより深く、より強く求めてくる。

「あぁっ、来てっ！　お兄ちゃんの全部、熱いのぉっ！　お腹に出してぇぇぇーーっ！！」

「うぉぉぉっ！！」

二度目の絶頂。僕は彼女の最奥で、すべてを解き放った。

「んあぁぁぁ……っ！！　熱いっ、熱いよぉ……っ！　お兄ちゃんの、またいっぱいに……なっちゃったぁ……っ！」

白濁した意識の中で、僕たちは永遠のような余韻に浸り続けた。

「……はぁ……。すごかった……」

イリヤが僕の胸に顔を埋め、消え入りそうな声で呟く。

「気持ちよかった？」

「うん……。人生で一番、気持ちよかった。……お兄ちゃんは？」

「僕もだ。イリヤ以外じゃ、もう満足できないかもしれない」

「よかった。……これでもう、お兄ちゃんは私のものだね。身体も、心も」

僕たちは再びキスを交わした。互いの温もりを確かめ合うような、深く優しいキスだった。

エピローグ：銀雪の朝、解けない魔法

障子の隙間から差し込む朝の光が、昨夜の情事の匂いが残る部屋を白く染め上げていく。

「……んぅ……。お兄ちゃん……？」

僕の微かな動きに感づいたのか、イリヤが目を開けた。

「ん……おはよぉ……ふぁ……」

彼女は甘えた声で欠伸をすると、猫のように僕の胸に顔を擦り付けてきた。

「はぁ……。身体、重いよぉ……。お兄ちゃんのせいだかんね……」

イリヤが身体をもぞもぞと動かし、僕の下腹部に自身のそれを押し付けてくる。

「んっ……！」

イリヤの身体がビクリと跳ね、甘い吐息が僕の首筋にかかる。

「……お兄ちゃん、また元気になってる。……嘘つき。目が、昨日の夜と同じ色してるくせに」

彼女は僕の上に跨り、豊かな胸が重力に従って揺れる。その先端は、すでに期待に震えるように硬く尖り、桜色に染まっていた。

「ねぇ……まだ、チェックアウトまで時間あるよね？ じゃあ……朝ごはんの前に、もう一回『いただきます』して？」

彼女はゆっくりと腰を下ろしていく。濡れた秘所が、僕の先端を捉えた。

「んんっ……、ぁ……っ、入る……っ」

「はぁ、はぁ……っ、お兄ちゃん、硬い……っ。朝の、すごく大きいよぉ……っ」

ズブズブと、ゆっくり時間をかけて呑み込まれていく感覚。根元まで収まった瞬間、イリヤは天を仰ぎ、身体を弓なりに反らせた。

「あぁ……っ、あぁ……っ！　奥まで、入ったぁ……っ！　んぅ……っ、見て、お兄ちゃん……。私のお腹、お兄ちゃんでパンパンになってる……」

「ひゃぁっ！　んっ、そこ……っ！　あぁんっ！」

僕たちは唇を重ね合わせ、緩やかに、しかし確実に絶頂へと登り詰めていく。イリヤの髪

が、汗で額に張り付いている。

「私……幸せ。お兄ちゃんがいてくれて、本当によかった……っ」

「僕もだ……イリヤ。一生、離さない」

「んぅ……っ、嬉しい……っ！ 私も、お兄ちゃんの精液（なかみ）、一滴も逃さないから……っ！」

「うぉぉぉっ！！」

二度目の絶頂。僕は彼女の最奥で、朝の生命力をすべて注ぎ込んだ。

「んあぁぁぁ……っ！！ 熱いっ、熱いよぉ……っ！ お兄ちゃんの、またいっぱいに……なっちゃったぁ……っ！」

情事の後、僕たちはもう一度温泉で汗を流し、遅い朝食をとった。

「ふふっ。お肌、つやつやになったかも」

助手席のイリヤが、サンバイザーの鏡を見ながら上機嫌に微笑む。

「うん！　帰ったら、また続き……しよっか？」

イリヤは小悪魔的なウィンクを投げかけてくる。どんな運命が待っていようとも、この温もりだけは絶対に守り抜くと、僕は心に誓った。

雪解けの道を走る僕たちの未来は、どこまでも明るく輝いているようだった。

～完～